

日本人英語教師のコロケーション容認度  
－「国際語」としての英語の中で－  
Acceptability of Collocations  
by Japanese Teachers of English

小屋 多恵子  
(法政大学)

下山 幸成  
(東洋学園大学)

**Abstract**

This study attempts to clarify the present acceptability of collocations by Japanese teachers of English by comparing it with that of native speakers of English, advanced EFL learners in Asian countries and Japanese returnees. Many Japanese teachers of English have long conceived the idea of EFL that English belongs to its native speakers and we should learn their language as a model. However, the idea has been opposed by the advocates of EIL (English as an International Language) which should be the language all the educated English speakers use and understand. From EIL perspective, it would be necessary to explore the possibility of establishing and confirming the educated speaker's collocations, and consider effective teaching methods of more acceptable collocations.

To achieve the goal, a survey was carried out to examine whether Japanese teachers of English would accept unclear answers produced by 130 Japanese university students. The two main results were obtained. One is that the acceptability of Japanese teachers of English made great difference among them. The other is that Japanese teachers of English had a wider acceptance of collocations than did native speakers of English and a narrower one than did advanced EFL learners in Asian countries and Japanese returnees. These findings would indicate that Japanese teachers of English should not only raise their awareness of the importance of teaching collocations to Japanese learners of English but also solidify their own knowledge of acceptable collocations.

キーワード： コロケーション, 「国際語」としての英語, 容認度

## 1. 目的

本研究は、「国際語」としての英語の概念が度々紹介される現在、日本人英語教師のコロケーション容認度を検証し、学習者に対するコロケーションの効果的な指導を検討することを目的とする。「国際語」としての英語の概念の下では、コロケーションも英語母語話者の基準をそのまま受け入れる指導ではなく、英語を話す全ての人々に理解され、容認される基準に沿った容認度の広い指導を提言することになる。学習者にとってどのような容認度に従ったコロケーション指導が効果的であるかを検討する上で、実情を調査・把握することは重要であると考えられる。

## 2. 先行研究

### 2.1. 「国際語」としての英語の概念の発展とその概念に基づいた英語教育

1980年代から英語は「英語母語話者だけに許された能力」に対して、「非英語母語話者であっても英語母語話者に匹敵する英語力を保有できる」という考え方が加わり、活発に議論されるようになってきた。Paikeday (1985, pp. 49-57) は、文法性の決定者は、ただ単に生物学的に英語を話す集団に誕生した話者であるのではなく、英語の熟達者であるとして伝統的な母語話者の定義に疑問を唱え、英語熟達者を重要視すべきであるとしている。また、Tay (1982, pp. 67-68) や Widdowson (1994, p. 381) は、小さい時に教育を受けることが大事であり、母語話者に第二言語としてその言語を学んだ人々を含めるべきだとしている。更に、Widdowson (1994, p. 381) は英語母語話者はみな英語のバリエーションの一種を話しており、学校場で標準英語<sup>1</sup>を学ぶため、標準英語を維持する権威は、母語話者にあるわけではないとしている。

2000年代になると、英語が英語母語話者だけのものではなく、優れた英語力を持つ非英語母語話者を含めた人々を対象に考えていく必要があるという考え方が広く普及してきた。Cook (2003, pp. 28-29) では、それまでの母語話者の伝統的な定義が含んでいない言語の様々な様相（英語母語話者の書く能力評価、コミュニケーション能力、語彙サイズ等の説明欠如）を評価することが重要だとしている。Crystal (2003, p. 110) は、「標準英語は種々の方言から合成された言語で、基準となる地方性がなく、母語話者もない」と指摘し、標準英語は文法、語彙、正書法といった言語特徴を持ち、政府、法廷、教育機関、メディアなどで用いられるものとしている。

それでは、国際語としての英語の状況を反映した英語母語話者、標準英語の新定義のもと、どのような英語をモデルとして教育現場で提示していくべきなのか。英語が世界の国々で話されている実情やその国の英語教育について近年紹介されることが多

い一方で (Crystal, 1987, 2003; Honna, 2002; Jenkins, 2003; Seidlhofer, 2003; 吉島 & 大橋, 2002)、矢野 (2004, pp. 188-189) は、世界の英語人口の実情を踏まえ、英語を語るのに汎人間的で全人類に対等な基準を構築することが必要と主張している。その基準になるものが、国際英語<sup>2</sup>、つまり EGL (English as a Global Language), EIL (English as an International Language) であり、それはいくつかの広域標準語がゆるやかな連合をなすものであり、相互理解度が高いものであり、地域使用の下層方言や中層方言に対し、国際使用の上層方言が国際英語になりうるものであるとしている。矢野 (2004, pp. 188-189) が挙げている国際英語の特徴は、(1) 複数の標準語の共有、(2) 相互理解度の保持、(3) 脱アングロアメリカン、(4) 言語的に、一般化 (非特殊化)、規則化 (非不規則化)、(他言語との) 共通化、社会言語的・文化的中立化 (英米文化特殊性→世界文化共通) である。

矢野 (2004, pp. 188-189) のように全人類に平等な基準を主張する国際英語の立場から英語教育<sup>3</sup>を考えると、日本では (1) モデルとなる英語は必要だが、それはイギリス標準英語やアメリカ標準英語などの単一のモデルでなく、英語の種々のモデルに共通なものがよい。(2) 単一モデルの正確な模倣ではなく、もっと幅を持たせ、相互理解を目標にした英語を目標にしてもいい。(3) 特に初期の英語学習者には、日本語なまりの英語であっても、文法的に間違いがあっても恐れることはなく、内容を重視して「使う」ことを優先する。という考えになる。

## 2.2. コロケーション指導の重要性とコロケーションに対する因習的な考え方についての先行研究

コロケーション指導の重要性は、主に、記憶、言語の流暢さと使用の適切さ、語彙モデルや指導の効果の点から論じられ、指導を推奨している研究者が多い。

### (1) 「言語知識＝コロケーション知識」とする考え方

言語知識や言語使用能力は、長期記憶にどの程度チャンクが収納されているか、そしてそれをどのくらい頻繁に使用したかによって説明できる。つまり、個々の単語ではなく、チャンクとして記憶し、その長期記憶にある様々なチャンクの中から適切なものを選び、それを使用して言語を流暢に使用する。(Ellis, 2001; Hill, 2000; Korosadowicz-Struzynska, 1980; Lewis, 1993, 2000; Nattinger & DeCarrico, 1992; Yorio, 1980) また、「言語知識＝コロケーション知識」に準ずる考え方で、言語知識の中の1つが、コロケーション知識であり、それは受容能力と発信能力の両方に属している。(Miller, 1999; Nation, 2001; Richards, 1976)

(2) 「多くの語はコロケーションの形で使用される」とする考え方

Sinclair (1991) の提唱した、どのようにテキストが構成されているかについての **open-choice principle**(自由選択原理)と **idiom principle**(非選択原理)。自由選択原理(文法規則に基づいて語彙の組み合わせが行われているとする)ではカバーできない制約が談話における語彙選択にはあり (**idiom principle**)、そのため言語使用者は単独で使える半固定フレーズ (**semi-preconstructed phrases**) を記憶して使用しているとする。そのため、(a) 語彙の共起には制限があり、(b) 多くの頻出語句が非語彙化 (**delexicalized**) され、(c) 実際の使用場面においては **idiom principle** が優位となる。

(3) 「フレーズパターンを指導すると、学習者の語彙が豊富になる」とする考え方

学習初期からできるだけフレーズパターンで教えることにより、学習の中間段階から語彙がより豊富になる。そのため、頻度、母語からの干渉等の基準から指導すべきフレーズを選択し、文脈の中でそのフレーズを提示すべきであるとしている。(Bahns, 1993; Caroli, 1998; Korosadowics-Stuzynska, 1980; Twaddell, 1973)

このように、英語学習者の英語力向上のカギはコロケーション習得であるという考え方から、コロケーション学習を早い時期から定着させる指導が多くの研究者から提言されている。

しかしながら他方で、コロケーションの指導についてはコロケーションの伝統的な特性を主張し、依然として多い否定的な見方が根強い。それは、コロケーションは英語母語話者の言語能力を最も反映したものであるという考えである。Crystal (1992) は、英語コロケーション能力を「唯一英語母語話者だけが確立し、確認することのできる能力」と定義している。McCarthy (2004) は、「コロケーションはそれを使う人々の文化との結びつきが強く、文化的な意味を含んでいる。そのため、英語コロケーションは英語母語話者だけが唯一正しいか間違っているかを判断できる。この命題についてはこれまであまり異論を唱える研究者はいない。」と述べている。また、McCarthy (2004) は英語母語話者だけがコロケーション能力の判断者であると考えていることを示すために、Dromou の研究を紹介している。Dromou は、英語非母語話者が書いたコロケーションを英語母語話者に判断させる実験を行ったところ、そのコロケーションを英語母語話者が書いたと言った時の方が容認度は高く、同じコロケーションを英語非母語話者が書いたと言った時では容認度は低くなるという結果を報告している。

この結果を提示することによって、英語母語話者は唯一容認できるコロケーションを発信でき、新たなコロケーションを作り出すことができると考えていることを支持している。

このように、コロケーション指導の重要性から指導を推奨している一方で、コロケーションは現在でも母語話者だけにその判断や生産が許されるものと主張されている。これは、「英語母語話者だけが標準英語の担い手ではない」「標準英語は後天的に学ぶ人々が担っている」とする考え方に相反するものである。

### 2.3. 「国際語」としての英語におけるコロケーション容認度の先行研究

小屋 (2006) では、依然として英語母語話者の言語能力を最も反映したものと考えられているコロケーションが、国際語としての英語の状況を受けて、英語母語話者にもみ許容されるものから、教養ある言葉としてすべての英語話者に共用されるものへと発展する可能性があるか検証した。コロケーションの容認度を、英語母語話者グループ、英語非母語話者で後天的に英語を習得したグループ (アジア人英語グループ、帰国生グループ) の3つのグループ間で比較を行ったところ、統計から、英語圏グループの容認度と他の2グループ (アジア人英語グループ、帰国生グループ) の容認度には有意差があるという結果が得られた。これは、英語圏グループのコロケーション容認度が依然として厳しいことを示している。そこで、より具体的に、日本人英語学習者に日々英語を指導している日本人英語教師はどのようなコロケーションの容認度を持っているか、そしてそれは小屋 (2006) の結果とどのような違いがあるか、追調査を行うことにした。

## 3. 本研究のリサーチクエスチョンと分析方法

### 3.1. リサーチクエスチョン

- (1) 4つの回答グループ間のコロケーション全体に対する容認度に差があるのか。
- (2) 4つの回答グループ間における個々のコロケーションに対する容認度に差があるのか。

### 3.2. アンケート

動詞+名詞のコロケーションを問う英作文問題に解答した日本人大学生 (n=130) の表現から、評価が難しいコロケーション 70 例を集め、アンケート用紙を作成した (Appendix 1 参照)。その 70 例を (1) 容認できる表現 (acceptable)、(2) 理解はできるが容認できない表現 (intelligible but not acceptable)、(3) 理解できない (not intelligible)

の3種類に分類してもらった。容認度は統計を使って検定するために、(1)を3点、(2)を2点、(3)を1点とした。

### 3.3 アンケート回答者と実施方法

アンケートは、英語圏で生まれ育った話者グループ（以後、英語圏グループ）、英語を第二外国語として学習したが英語母語話者に匹敵する英語力を持っているアジア人グループ（以後、アジア人グループ）、英語圏を含む外国で10年以上暮らしていた日本人帰国生グループ（以後、帰国生グループ）、日本人英語教師（以後、日本人教師グループ）の4グループを対象とした。

アンケートをこの4グループに当てはまる人たちに答えてもらった。回答者は日本人教師グループは、大学・高等学校の英語教師から、英語圏グループ、アジア人グループ、帰国生グループは、主に留学生、大学生、高校生から構成されている。英語圏グループの中に、国籍がフランスとマレーシアの人々が入っているが、これは母国より英語圏で過ごす方が長く、自らの母語を英語と表記している人たちである。また、アジア人グループの人々は、TOEFLのような公式英語テストのスコアこそないが、配布をお願いした英語教師が英語母語話者並みの英語力を持つと判断した英語熟達者である。帰国生グループの人々は、10年以上外国生活を送っており、みな日本語と英語の両方を母語であると回答している。回答者の性別は男女混合であり、年齢は高校生から60歳までと幅広い。

## 4. 分析と結果

### (1) グループ間のコロケーション全体に対する容認度に差があるのか。

グループ間の容認度に差があるかどうかを調べるために、各グループの総得点を用いてクラスカル・ウォリスの順位和検定を行った。結果は表1に見られるように、 $\chi^2(3) = 12.723, p < .05$ で、グループ間の差は5%水準で有意であった。

表1 クラスカル・ウォリスによる順位和検定の結果

Group	n	Mean ranks	df	$\chi^2$	p
英語圏グループ	16	17.94	3	12.723	.005
アジア人グループ	8	35.94			
帰国生グループ	13	37.88			
日本人教師グループ	19	27.84			

どのグループ間に統計的有意差があるかを調べるために、それぞれのグループ間でマン・ホイットニーのU検定、並びにボンフェローニの修正 ( $p < .008$ ) を行った。その結果、「英語圏グループ」と「アジア人グループ」 ( $U = 14.000, p = .002$ ) および「英語圏グループ」と「帰国生グループ」 ( $U = 35.000, p = .002$ ) との間に有意差が見られた。

## (2) グループ間における個々のコロケーションに対する容認度に差があるのか。

次に、個々のコロケーションに対するグループ間容認度の差があるかどうかを検討するために、コロケーションごとに同様の手順で分析をした。その結果、どこかのグループ間で有意差が出たのは70問中19問であり、420通りの組み合わせの中で22例であった (Appendix 2 参照)。このことから、多くの表現においてグループ間の容認度に差があるとはいえないことがわかる。

また、各グループ内総得点の記述統計量は表2の通りである。日本人教師グループでは、他のグループと比べて回答にかなりのばらつきがあるとわかる。

表2 各グループ内総得点の記述統計量

Group	n	最小値	最大値	平均値	標準偏差
英語圏グループ	16	111	145	122.31	10.556
アジア人グループ	8	119	149	139.38	9.561
帰国生グループ	13	107	154	141.00	14.254
日本人教師グループ	19	104	210	134.95	24.805

## 5. 考察

特出すべき結果は、日本人教師全体のコロケーション容認度と個人のコロケーション容認度についてである。リサーチクエスチョン(1)の結果により、日本人英語学習者により表記されたコロケーションに対する「英語圏グループ」の容認度は、「アジア人グループ」と「帰国生グループ」と比べると有意に低く、「日本人教師グループ」と比べると有意差はないものの低いとわかった。各グループの平均ランクから判断すると、容認度は「【高い】帰国生>アジア>日本人教師>英語圏【低い】」であると考えられる。この結果は、先行研究 (McCarthy 2004, 小屋 2006)の「英語圏グループ」がかなり厳しいコロケーション容認度を持っているとの結果から考えると、予想の範囲内であった。また、「日本人教師グループ」は指導者として正確さからの指導も行う立場であるため、「アジア人グループ」や「帰国生グループ」よりも容認度が低いという結果も想定内である。しかしながら、表2の各グループ内総得点の記述統計量の結果から、日本人教師は個人によってかなり容認度の幅があるということが明らかになった。

このことは、日本人英語教師の中で、英語母語話者が認めてもよいとするコロケーションのみ容認するという教師と、英語母語話者だけでなく英語非母語話者が認めてもよいとするコロケーションまで幅広く容認するという教師が実在するということである。その結果、日本人英語学習者は担当教師によって指導の基準が様々であるということが予測される。

この結果は、日本人英語教師のコロケーション指導に対する目標や指針を共有するところまで至っていないと考えられる。それは、これまで日本の英語教育においてコロケーション指導についても明確な指針を示しておらず、現行の学習指導要領においては、中学校・高等学校とも言語材料に「連語は基本的なものを選択して指導する。」とあるだけで、具体的な目標や指導法について明記されていないことの反映であろう。

## 6. 教育的示唆（コロケーション指導）日本人英語学習者への適用

「国際語」としての英語の概念を考慮した場合、そして英語のコミュニケーション能力向上が英語指導の大きな目標となっていることから考えると、日本人英語教師はコロケーションにかんしてどのような点に留意すべきであろうか。以下の4点を提案する。

### (1) コロケーションを教えることの意義を認める

2.2で示したように、様々な観点からコロケーション指導の重要性を唱える研究者が多い。そのことを念頭において実際の指導に当たるべきである。

### (2) コロケーションを指導する

Koya (2004a, 2004b)で高等学校英語 I, II の教科書分析を行った結果、コロケーション指導に配慮した教科書作りが行われていないことがわかった。従って、教師が工夫してコロケーション指導を行う必要がある。教科書の新出語彙と結びつく頻度が高く、学習すべきコロケーションは、文脈の中で明示的な指導をする。このような指導が効果的であることは多くの研究者が主張していることである (Gitsaki & Taylor, 1999; Hill, 2002; Howarth 1998; Lewis, 2002)。また、コロケーション視点や英英辞典の使用を推奨したり、コーパスに基づいたコロケーションの提示も可能であろう。

### (3) 学習者のコロケーションのアウトプットに関しては容認度を高くする

授業の目的によるところが多いが、一般的にアウトプットでは臆することなく容認



できるコロケーションの発信を重視するべきである。学習初期の段階では流暢な発話を第一に考え、許容範囲を広く取って誤りを直し過ぎないことが大切である。段階が進むにつれて、より容認性が高いコロケーションを流暢に且つ正確に発話できるように指導の目的を変えるべきである。

#### (4) 自信を持って教える

指導する英語教師が自信を持ってコロケーション指導が行えるように、教師のコロケーション能力を高めるべきである。身近にあるコーパスを使用して、教科書に出てきた語彙と結びつきの強いコロケーションの使用頻度を調べることも容易である。また、学習者の間違いやすいコロケーションを認識しておくことも、自信を持って教える指導につながるであろう。

## 7. 今後の研究課題

今回の研究により、日本人英語教師のコロケーション容認度にばらつきがあることがわかった。そのため、教師によって様々な指導が行われていることは想像できるが、実際にこの日本人英語教師のコロケーション容認度の差が英語指導にどのような影響を与えているかを検証する必要がある。また、日本人英語教師のコロケーションの捉え方、学習経験などコロケーション指導の深層を探る研究も行われるべきであろう。これらの研究は、今後の課題としたい。

### 注

本稿は、2007年9月7日に安田女子大学で開催された第46回 JACET 全国大会における口頭発表に加筆修正を行ったものである。

1. Widdowson (1994, p. 385) は、標準英語を、「効果的なコミュニケーションを提供すると同時に、ある特定のコミュニティにおける象徴的な所有物であり、アイデンティティの表現であり、その習慣や価値を表すものである。それは、遠隔通信や情報科学の発展により、世界中に発信されるものである。英語が地球上の多くの人々のコミュニケーション手段となった時点で、標準英語はその多くの英語話者が理解できるものであるべきである。」と説明している。

2. 「国際語としての英語」と「国際英語」は別の概念を表す言葉として使用している。「国際語としての英語」は、英語人口増加にともない英語が世界中で話される国際的な役割を担っている言語という意味であり、「国際英語」とは矢野 (2004) が言っている全人類に対等な基準となる英語という意味で、構築されるべき具体的な英語である。

3. 矢野(2004)の国際語としての英語の概念に基づいた英語教育には、依然として強い反論がある。例えば次の3点から反論できる。(1) 国際英語はまだ実態がなく、学習者に提示できないものを教えることはできないのではないか。(2) 日本では根強い英語母語話者至上主義があるのではないか。(3) インプットのモデルはどの英語にすべきであろうか?アウトプットではどこまで許容範囲を広げるべきであろうか。

## 参考文献

- Bahns, J. (1993). Lexical collocations: A contrastive view. *ELT Journal*, 47(1), 56-63.
- Caroli, M. T. (1998). Relating collocations to foreign language learning. Unpublished master's thesis. University of Reading, Reading, United Kingdom.
- Cook, G. (2003). *Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Crystal, D. (1987). *The Cambridge Encyclopedia of Language*. New York: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (1992). *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. London: Andre Deutsch.
- Crystal, D. (2003). *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, 2<sup>nd</sup> Ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, N. C. (2001). Memory for language. In P. Robinson (Ed.), *Cognition and second language instruction* (pp. 33-68). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gitsaki, C., & Taylor, R. P. (1999). *English collocations and their place in the EFL Classroom*. Retrieved July 23, 1999, from [www.jr.asu.ac.jp/~rtaylor/collocations.html](http://www.jr.asu.ac.jp/~rtaylor/collocations.html).
- Hill, J. (2000). Revising priorities: from grammatical failure to collocational success. In M. Lewis (Ed.), *Teaching collocation* (pp. 28-46). Hove: Language Teaching Publications.
- Howarth, P. (1998). Phraseology and second language proficiency. *Applied Linguistics*, 19(1), 24-44.
- Jenkins, J. (2003). *World Englishes*. New York: Routledge.
- Korosadowicz-Struzynska, M. (1980). Word collocations in FL vocabulary instruction. *Studia Anglica Posnaniensia*, 12, 109-120.
- Koya, T. (2004a). A comparison of verb-noun collocations collected from revised high school English textbooks in Japan. *The Bulletin of the Graduate School of Education of Waseda University*, 11(2), 55-70.

- Koya, T. (2004b). Collocation research based on corpora collected from high school English textbooks in Japan. In Y. Watanabe, I. Nagano, & A. Morita (Eds.), *Collection of papers in honor of Professor Yoshiaki Shinoda*, (pp. 99-113). Tokyo: Nanundo.
- Lewis, M. (Ed.). (1993). *The lexical approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Lewis, M. (Ed.). (2000). *Teaching collocation*. Hove: Language Teaching Publications.
- Lewis, M. (Ed.). (2002). *Implementing the lexical approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- McCarthy, M. (2004, August). *Collocation in Vocabulary Teaching and Learning*. Lecture given at the meeting of JACET summer seminar program, Gunma, Japan.
- Miller, G. A. (1999). On knowing a word. *Annual Review of Psychology*, 50, 1-19.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nattinger, J., & DeCarrico, J. S. (1992). *Lexical phrases and language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Paikeday, T. M. (1985). *The Native Speaker is Dead!* Tronto: Paikeday.
- Richards, J. C. (1976). The role of vocabulary teaching. *TESOL Quarterly*, 10(1), 77-89.
- Seidlhofer, B. (Ed.). (2003). *Controversies in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Sinclair, J. McH. (1991). *Corpus, concordance, collocation*. Oxford: Oxford University Press.
- Tay, M. (1982). The uses, users and features of English in Singapore. In J. Pride (Ed.). *New Englishes* (pp. 51-70). Rowley, MA: Newbury House.
- Twaddell, F. (1973). Vocabulary expansion in the TESL classroom. *TESOL Quarterly*, 10, 19-32.
- Widdowson, H. G. (1994). The ownership of English. *TESOL Quarterly* 28/2, 377-89.
- Yorio, C. A. (1980). Conventionalized language forms and the development of communicative competence. *TESOL Quarterly*, 14(4), 433-442.

本名信行編 (2002) 『アジア英語辞典』三省堂

矢野安剛 (2004) 『『外国語としての英語』から『国際語としての英語』へ: 英語教育再考』『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』14号, 179-195.

吉島茂, 大橋理枝 (翻訳) (2004) 『外国語教育(2) 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

## Appendix 1 調査に用いた 70 例と各グループ別平均値

No.	日本人英語学習者により表記されたコロケーション	下線部分の 正解例	英語 圏	ア ジ ア	帰 国	日 本 人
No.01	a) The school festival will <u>open</u> next month.	take place	2.00	2.13	2.38	1.90
No.02	b) The school festival will <u>be placed</u> next month.		1.41	1.63	2.46	1.55
No.03	a) Your advice doesn't <u>give effect on</u> them.	has no effect on	1.41	1.88	1.62	2.10
No.04	b) Your advice doesn't <u>make effect on</u> them.		1.76	2.13	2.46	1.95
No.05	c) Your advice doesn't <u>take effect on</u> them.		1.29	1.88	1.31	1.55
No.06	a) <u>Use your time</u> .	Take your time.	1.12	1.63	2.46	1.55
No.07	b) <u>Have your time</u> .		1.35	2.50	2.08	1.75
No.08	c) <u>Spend your time</u> .		1.12	2.00	1.77	1.55
No.09	d) <u>Make your time</u> .		1.06	1.50	1.77	1.40
No.10	a) I <u>did a big decision</u> .	made a big decision	2.00	1.88	1.23	2.10
No.11	b) I <u>had a big decision</u> .		1.59	2.25	2.46	2.25
No.12	c) I <u>decided a big decision</u> .		1.94	1.75	1.85	2.00
No.13	d) I <u>decided a big point</u> .		1.82	1.75	2.23	1.20
No.14	e) I <u>decided a big thing</u> .		1.88	2.50	2.62	1.80
No.15	a) You <u>had a good job!</u>	did a good job	1.29	1.50	1.31	1.90
No.16	b) You <u>brought about a good job!</u>		1.35	1.75	1.38	1.30
No.17	c) You <u>worked a good job!</u>		1.35	1.63	1.62	1.45
No.18	a) I <u>threw him a question</u> .	asked him a question	2.47	1.75	2.31	1.85
No.19	b) I <u>gave him a question</u> .		2.53	2.38	2.54	2.40
No.20	c) I <u>made him a question</u> .		1.24	1.13	2.08	1.35
No.21	a) She <u>turned her head</u> .	shook her head	1.18	1.88	1.69	1.30
No.22	b) She <u>swung her head</u> .		1.18	1.63	1.77	1.20
No.23	a) I <u>took a role of Hamlet</u> .	played the role of	1.94	2.38	2.62	2.25
No.24	a) <u>Give way for</u> the ambulance.	Make way for	2.53	2.63	2.38	2.40
No.25	b) <u>Make the way for</u> the ambulance.		1.65	2.00	2.15	2.25
No.26	c) <u>Make a way for</u> the ambulance.		2.06	1.75	2.15	2.25
No.27	d) <u>Make way to</u> the ambulance.		1.41	1.63	1.92	2.05
No.28	a) <u>Don't do action</u> until I tell you to.	Take no action	2.06	2.13	1.69	2.00
No.29	b) <u>Make no action</u> until I tell you to.		2.12	1.75	2.23	2.40
No.30	a) His mail <u>doesn't make a sense</u> to me.	doesn't make sense	2.12	2.50	2.08	2.15
No.31	b) His mail <u>doesn't make the sense</u> to me.		1.71	1.88	1.38	2.00
No.32	c) His mail <u>doesn't have sense</u> to me.		1.59	1.25	1.54	1.90
No.33	d) His mail <u>doesn't take a sense</u> to me.		1.12	1.25	1.38	1.20
No.34	a) He <u>made his way</u> to our house.	found his way	2.88	2.00	2.77	2.10
No.35	b) He <u>got the way</u> to our house.		1.35	2.38	1.77	1.45
No.36	a) We must <u>take step</u> to prevent such crimes.	take steps	2.12	1.88	1.62	2.10
No.37	b) We must <u>take a step</u> to prevent such crimes.		1.94	2.00	2.38	2.35

No.	日本人英語学習者により表記されたコロケーション	下線部分の正解例	英語圏	アジア	帰国	日本人
No.38	a) <u>Take care of your body.</u>	Take care of yourself.	2.24	1.88	2.31	1.95
No.39	b) <u>Take care of your health.</u>		2.76	2.38	2.00	2.55
No.40	a) Please <u>answer to my question.</u>	answer my question	2.06	2.00	2.54	2.25
No.41	a) He <u>has a great point of</u> being on time.	makes a great point of	1.47	2.25	2.23	1.75
No.42	b) He <u>takes a great point of</u> being on time.		1.29	1.88	1.54	1.70
No.43	c) He <u>is a great point of</u> being on time.		1.06	1.13	1.31	1.10
No.44	a) She <u>advantaged</u> her position.	took full advantage of	1.12	1.75	1.92	1.60
No.45	a) I <u>answered a math problem.</u>	solved a math problem	2.76	2.50	2.85	2.35
No.46	b) I <u>resolved a math problem.</u>		2.12	2.00	2.38	1.90
No.47	a) My brother <u>had a job</u> as a secretary with the company last year.	got a job	1.82	2.25	1.85	2.25
No.48	a) You <u>had several spelling mistakes</u> in your essay.	made several spelling mistakes	2.94	2.88	3.00	2.65
No.49	b) You <u>took several spelling mistakes</u> in your essay.		1.59	1.50	1.77	1.70
No.50	a) I will <u>do every effort</u> to find him.	make every effort	2.24	2.50	1.54	2.15
No.51	b) I will <u>spend every effort</u> to find him.		1.71	1.88	2.08	1.65
No.52	a) These patients <u>are in the trouble</u> walking.	have trouble (in)	1.18	2.25	1.85	1.95
No.53	b) These patients <u>take trouble in</u> walking.		1.35	1.63	1.62	1.55
No.54	c) These patients <u>get trouble in</u> walking.		1.29	2.00	1.46	1.90
No.55	a) He <u>shook her hand</u> in his.	held her hand	1.18	1.50	2.15	1.55
No.56	b) He <u>shook hands</u> in his.		1.00	1.63	1.31	1.30
No.57	a) He <u>has no attention to</u> others' feelings.	pays no attention to	1.71	2.00	2.54	2.25
No.58	b) He <u>takes no attention to</u> others' feelings.		2.00	2.63	2.62	2.00
No.59	a) She <u>took the question</u> of finding his successor.	raised the question	1.29	1.50	1.69	1.50
No.60	b) She <u>had the question</u> of finding his successor.		1.18	2.25	2.23	1.65
No.61	c) She <u>gave the question</u> of finding his successor.		1.76	2.25	2.08	2.05
No.62	a) The meeting <u>was open</u> to discuss the question.	was held	1.53	1.63	1.38	1.60
No.63	b) The meeting <u>was opened</u> to discuss the question.		2.12	1.88	1.77	2.00
No.64	c) The meeting <u>was made</u> to discuss the question.		2.12	2.25	2.69	1.75
No.65	a) Can you <u>raise an example</u> ?	give me an example	1.94	2.63	2.15	1.70
No.66	b) Can you <u>pick up an example</u> ?		1.71	2.75	1.85	2.10
No.67	a) I cannot <u>tell you an answer</u> now.	give you an answer	2.41	2.63	2.08	2.45
No.68	a) I <u>performed an important role</u> at the meeting.	played an important role	2.47	2.50	2.31	2.65
No.69	b) I <u>acted an important role</u> at the meeting.		1.76	1.88	1.85	2.15
No.70	c) I <u>took an important role</u> at the meeting.		2.06	2.50	2.62	2.30

Appendix 2 個々のコロケーションにおける各グループ間の比較（有意差がでたもののみ）

「英語圏グループ」と「日本人教師グループ」

No.	日本人英語学習者により 表記された表現	正解例	英語圏 グループ 平均	日本人 教師 グループ 平均	<i>p</i>
No.03	Your advice <u>doesn't give effect on</u> them.	has no effect on	1.41	2.10	.001
No.34	He <u>made his way</u> to our house.	found his way	2.88	2.10	.000
No.52	These patients <u>are in the trouble</u> walking.	have trouble (in)	1.18	1.95	.002

「帰国生グループ」と「日本人教師グループ」

No.	日本人英語学習者により 表記された表現	正解例	帰国生 グループ 平均	日本人 教師 グループ 平均	<i>p</i>
No.02	The school festival will <u>be placed</u> next month.	take place	2.46	1.55	.006
No.06	<u>Use your time.</u>	Take your time.	2.46	1.55	.007
No.10	I <u>did a big decision.</u>	made a big decision	1.23	2.10	.001
No.13	I <u>decided a big point.</u>		2.23	1.20	.000
No.31	His mail <u>doesn't make the sense</u> to me.	doesn't make sense	1.38	2.00	.006
No.34	He <u>made his way</u> to our house.	found his way	2.77	2.10	.005
No.64	The meeting <u>was made</u> to discuss the question.	was held	2.69	1.75	.001

「英語圏グループ」と「アジア人グループ」

No.	日本人英語学習者により 表記された表現	正解例	英語圏 グループ 平均	アジア人 グループ 平均	<i>p</i>
No.07	<u>Have your time.</u>	Take your time.	1.35	2.50	.005
No.66	Can you <u>pick up an example</u> ?	give me an example	1.71	2.75	.003

## 「英語圏グループ」と「帰国生グループ」

No.	日本人英語学習者により 表記された表現	正解例	英語圏 グループ 平均	帰国生 グループ 平均	$p$
No.06	<u>Use your time.</u>	Take your time.	1.12	2.46	.000
No.09	<u>Make your time.</u>		1.06	1.77	.001
No.10	I <u>did a big decision.</u>	made a big decision	2.00	1.23	.001
No.20	I <u>made him a question.</u>	asked him a question	1.24	2.08	.006
No.23	I <u>took a role of</u> Hamlet.	played the role of	1.94	2.62	.005
No.39	<u>Take care of your health.</u>	Take care of yourself.	2.76	2.00	.003
No.55	He <u>shook her hand</u> in his.	held her hand	1.18	2.15	.000
No.57	He <u>has no attention to</u> others' feelings.	pays no attention to	1.71	2.54	.002
No.60	She <u>had the question</u> of finding his successor.	raised the question	1.18	2.23	.000

## 「アジア人グループ」と「帰国生グループ」

No.	日本人英語学習者により 表記された表現	正解例	アジア人 グループ 平均	帰国生 グループ 平均	$p$
No.50	I will <u>do every effort</u> to find him.	make every effort	2.50	1.54	.005